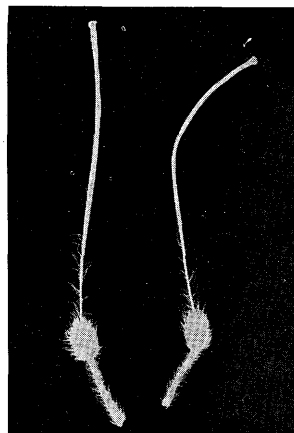


○木曾谷のミツバツツジ類 (奥原弘人) Hiroto OKUHARA: Species of *Rhododendron* sect. *Sciadorhodion* in Kiso valley, Nagano prefecture

南信州の木曾谷(西筑摩郡の内)に産するミツバツツジ類はミツバツツジ *Rhododendron dilatatum* Miq., コバノミツバツツジ *R. reticulatum* D. Don, トウゴクミツバツツジ *R. Wadanum* Makino, ダイセンミツバツツジ *R. W. var. lagopus* (Nakai) Hara の4種類である。此の他に稀少ながらコバノミツバツツジの変り物としてシロバナミツバツツジ *R. r. f. albiflorum* (Mak.) Mak., ナギソミツバツツジ(新称) *R. r. f. trichostylum* Mizushima<sup>1)</sup> も見られる。然し民間では以上を区別することなく、産地、花色、花期などによってイワツツジ、ムラサキツツジ、ナワシロツツジなどと称している。ナギソミツバツツジは筆者が此の谷の南部、読書(ヨミカキ)、山口の両村で採集し、水島正美氏によって命名されたものである。和名は南木曾(ナギソ)に因んだ。これはコバノミツバツツジが花柱無毛なのに対し、其の下半部に2~3 mm 長の白毛を散生する点が異なる。

木曾谷の中でも特に南部には此の類のツツジが多く、春の山野を彩って美事である。これ等の花期はミツバツツジが最も早く、3月下旬から4月上旬に亘り、コバノミツバツツジがそれに次いで4月中~下旬である。ダイセンミツバツツジは更に遅れ、4月下旬から5月上旬にかけて開く。トウゴクミツバツツジは南部では4月下旬から、北~西部の谷間では5月から6月上旬にかけて比較的長期間に咲く。



ナギソミツバツツジの花柱。×2/3.

上記4種類の中、コバノミツバツツジ(土深い丘陵生)は九州、対馬、中国地方、四国に普通な暖地性種で、静岡県西部を東限として木曾谷南部にまで北上している(シロバナミツバツツジは南部の大桑村に産する)。関東、中部、東海地方の丘陵から低山に普通で近畿東部を西限とするミツバツツジ(岩山生)は、大きく見ればコバノミツバツツジと混生することになるが、生育する基盤を異にするのが興味ある点と言えよう。これ等よりも高地或は北部に産するものにダイセンミツバツツジとトウゴクミツバツツジがある。前者は岐阜県以西、近畿、中国地方の山地に分布し、木曾谷では中部の上松

1) *Rhododendron reticulatum* D. Don f. **trichostylum** Mizushima, f. nov.

A typo cum stylis glaberrimis differt iis infra medium villis albis 2-3 mm longis sparse conspersis. (cf. photo.)

Hab. Honshû: Yamaguchi-mura, Nishi-chikuma-gun, Nagano pref. (prov. Shinano) (Apr. 22, 1956, Hiroto Okumura)—type in Makino Herbarium, Tokyo Metropolitan University.

(アゲマツ) 町を主産地として以南に散見する。此の分布状態は北上したと見るよりも、1000 m 位の低い山稜を東へ越えて来たものと見るべきかもしれない。後者は東北地方の南半、関東、中部、東海諸地方の 1000 m 前後の山地を占めるが、上松よりも北～西部の谷間に多産し、南半では木曽川支流の溪谷（本流々域よりも春が遅い）にはこれが多い。両者は別種とされているが、大きな差は花柱下半部の粒状腺の有無にしかないように思われる。従って東西に分れて分布する変種の関係に置くのも良いと考える。そうすると木曽谷は本州特産のトウゴクミツバツツジ（ダイセンを含む）の両地理的変形が相接する場所となる。此の関係は九州、四国から紀伊半島に分布するトサノミツバツツジと上記のミツバツツジにも当てはまると思える。即ち前者は 10 雄蕊、後者は 5 雄蕊という差を持った同一種内の変種同志となり、分布域の北東部に産するミツバツツジのみがあることになる。こう見て来ると木曽谷には西南日本系のミツバツツジ、コバノミツバツツジと本州西南部～北部南半に分布するトウゴクミツバツツジ（広義）とを産し、ミツバツツジ類全体として考える時、分布域の重心は西南に偏したものとなる。これは木曽谷に暖地性植物を数多く産するという事実と合致した現象である。

此の小文を草するに当り、東京都立大学の水島正美氏に負うところ大である。記して感謝の意を表する次第である。（長野県西筑摩郡玉滝中学校）

---

□ Darrah, W. C.: **Principle of Palaeobotany** pp. 295, 63 figs. The Ronald Press Co., New York (1960) 6.5 ドル

著者はゲテスバーグ大学の生物学副教授で石炭紀を主専攻とする古植物学者。本書は 1939 年に出版されたものの再版である。内容 23 章の内、初版の第 6 章の「ブシロブシダ(統)」が再版では「デボン紀の植物」と改題され、デボン紀のフロラがまとめて述べられている他は、各章の題目は変わっていない。しかし初版の 236 頁が再版では 295 頁とふくらみ、この 20 年間の新知見が加えられている他、図が多数ふえている。殊に Mägdefrau, Seward その他から引用された各地質時代の生態図が十数葉あるのが楽しめる。

植物分類群を縦にまとめて記述する他に、デボン紀・石炭紀・中生代・白堊紀・新生代等各時代の植物を横にまとめてフロラについても言及している古植物学の本はめずらしい。各植物群中の科・属の記載は簡単に要領よく書かれてあり、解剖学的特徴もあげられているが、解剖図が無いので、それを理解するには相当の解剖学の素養が必要である。文献として植物学の教科書や論文が可成り引用されている。例えば Bailey 等の材の研究が針葉樹類や被子植物の進化や起源に関してしばしば引用されているが、その点「植物学的な古植物学」であるといえる。古生物学はもちろん、分類学、形態学、進化学